

陽の里

発行 平成13年1月1日



社会福祉法人 新生会
総合ケアセンター

サンビレッジ

No.73

2001年 **テーマ** 第5回「職員育成の一環として」



▲夜明けの町 撮影 内田上松氏

二十一世紀は「高齢者の世紀」

岐阜県健康福祉環境部福祉局長 小野崎 弘樹

日本の高齢化は世界のどの国も経験したことのない速さで進んでおり、さらに団塊の世代が高齢期を迎えることにより、少子化とも相まって超高齢社会が到来します。介護保険開始に合わせ策定した「岐阜県生産安心計画」では、県民の将来像として「自らの健康は自ら守り、つくる」、「高齢者がいつまでもより健康に」、「住み慣れた家庭・地域での介護システムの充実」、「高齢社会を支える二十一世紀の地域づくり」を提示しました。

二十一世紀は「高齢者の世紀」と言われますが、高齢者の多くは元気で社会的にも十分活躍できる方です。今後、社会においてさらに大きな割合を占めることとなる高齢者が、可能な限り健康で生きがいを持って社会参加できるよう支援していきたいと考えます。そのためには、痴呆や寝たきりなどの障害を予防するための対策が重要です。一方、介護が必要となられた方へは、できる限り住み慣れた家庭や地域で、本人の選択に応じた必要な介護や医療を、終身にわたり安心して利用できるようなシステムの充実が求められています。そしてまた、高齢社会を住民相互に支え合うことのできる地域づくりも大切です。

高齢化や少子化は、家族や自分たちの身近な問題ですし、社会全体の構造や活力がどうなっていくかという大きな問題でもあります。いよいよスタートした「高齢者の世紀」に真正面から向き合い、安らかに元気な岐阜県が実現されるよう、心を新たにし取り組んでいきたいと考えております。

二十一世紀、

明けましておめでとーございませす。

新生会理事長 石原美智子



二十一世紀は少子高齢社会の幕開けでもあります。そして特別養護老人ホーム・サンビレッジ新生苑は、四月十五日で満二十五周年を迎えます。私達はこの四半世紀で、質の高い介護があれば、障害を持ってても食事・排泄・清潔・安眠などが保障され、その上、人生が終るまで楽しい時を過ごすことが可能であるという実績を積み上げてきました。

二千年四月から介護保険が始まり、日本の社会全体が高齢社会へ大きくシフトしています。経済も教育も医療も、あらゆる分野が高齢者を視野に入れずには済まなくなっています。

少子高齢社会を迎えるこれからの時代は、施設のみを頼った老人福祉施策では対応していくことができません。

住み慣れた我が家や地域で、障害を持っても限りなく最後まで住み続けることを可能にしていかなければなりません。そのためには住宅改造、車椅子輸送システム、寝具などの洗濯、老人食・特食の配達、バリアフリーの街づくりなどのハ

ードの整備、二十四時間三百六十五日訪問可能な介護、看護、往診などのソフトの整備など、準備しなければならぬことがたくさんあります。

介護保険の施行で実践の可能性が高くなりました。基本的なサービスは保険がカバーをしてくれますから、住民、行政、

事業者などが力を合わせ、知恵を出し合って安心できる老後を作り上げていくことができます。

実現できるかどうかは、本人はさることながら、家族や周囲の人々の意識改革にかかっています。

障害を持ってても幸せな老後を過ごすことが可能だと思えること、他人を家に入れることを嫌がらないこと、世間体と戦う勇気を持つことがその条件です。

障害と共に賢く生きる人が多くなる時に、質の高いサービスが周囲に多くなるのです。



▲左より石原理事長、洋子・マーフィーさん、バーバラ・デルメニコさん

第五回「介護の質の向上を目指して」

現場からのメッセージ

職員育成の一環として

ホームの暮らしが住みやすいと感じられる「生活の質」とは何で見る事が出来るのでしょうか。建物の様に目に見える所はよく分かりますが「介護の質」の様に目に見えにくい所もあります。サンビレッジは開苑当初から利用者の立場に立つ事を基本理念として「介護の質」の向上を目指し、取り組んできました。しかしまだまだ未完成な所を認識しております。今回第五回として、「職員育成の一環として」をお送りします。

オーストラリアで学んだ事

施設部長 大窪 明美

サンビレッジでは、毎年オーストラリアの姉妹施設であるクイーンエリザベスセンターへ研修に行っております。今年は、私を含め三人が一ヶ月間、オーストラリアの福祉を実際に見、利用者の中に入り、実習させていただきました。

まず第一に感じた事は、人に優しい国である事です。

健康福祉システムのどの部分をとつても、個人の権利が保障され、本人の思いを第一に考えたサービスが整っている為、重度の障害を持つた方が、在宅サービスを使い一人で暮らしておられたり、施設は平屋で、トイレ、シャワー付の個室と、プライバシーが守られ、使い慣れた家具が持ち込まれ、

家庭での生活が継続されていきました。

そのシステムは、活発なボランティア活動によって支えられています。毎日の配食サービス、デイサービスの送迎、アクティビティ、手工芸の指導、ホスピスでの精神的援助等、職員かとの間違える程です。そういったボランティアは、組織的に活発な寄付活動やオンブズマン的役割も果たしており、福祉の重要な役割を担っていました。



そういつたボランティア意識の高さは、挨拶をする誰もが、「Have a good day? Are you happy?」と声を掛け合い、一日一日、一瞬一瞬を楽しく悔いのない生活を送る事を大切にし、相手が必要で、うでなければ何が必要で、その為に自分にできることは、と尋ねるといつた日常会話からも感じました。その為、寄付やボランティアといった国民の社会参加の意識が高く、そういつた意識が国や地域を動かし、人に優しいシステムができたのだと感じました。

障害を持ってても、老いても「今日は楽しかった」「最高の人生だった」と言えるような安心して暮らせる優しい社会を作っていく為には、私達一人ひとりが自分を大切にし、社会に対しても参加と責任の意識を高めていく必要があると強く感じ、学んできました。

実習受け入れからの学び

研修担当 金森美江

当施設は年間、福祉系の大学生・専門学校生・学校の先生・ヘルパーなど多くの実習生を受け入れている。

当初、実習生を受け入れる際、現場のスタッフは消極的であった。「お年寄りの事で精一杯。学生の指導までできない」との声。確かに、専門のスタッフが介護する方が適切な対応をするに違いないし、利用者の方にとっても安心だ。

サンビレッジ新生苑は職員研修の一環として、各施設や海外研修を取り入れ、今の自己を見つめ、一歩引いたところから現場を見つめ直している。それを、研修発表など行い、全職員の学びとしている。その中で、

言葉使いに対して慣れ合いになっていないか、提供しているサービスは利用者の方の要望にあっているのかなどの再評価や、実習生の接し方より気付かされる事があった。「あの掛け声はとてもしいねえ」とか、「あの服装は、清潔感があるね」など、実習生を受け入れることで現場を客観的に見つめ直すことができた。

実習生を指導するには、それだけの知識や技術を要求される。質問されれば答えなければいけない。しかし、十人十色の解答では学生は悩む。そこで、職員の中で意識を統一し、実習生の受け入れに際してマニュアルを作り、誰もが指導で



▲ふれあいタイム

きる体制を整えた。結果、職員の認識の中にこれから自分達の仲間を育てていくという意識が生まれた。そして、質問に答えるのではなく、実習生に考えさせる指導の方法を心掛けるようになった。

実習生の受け入れにより、利用者も実習生の介助で散歩や買い物など、生活の幅が広がってきた。

お知らせ

★その一

日本自転車振興会競輪及び池田町より補助金を頂戴して痴呆対応型共同生活介護(グループホーム)木もれびの家を開設しました。利用者六名が一つの家族となり、穏やかに過ごしてみえます。

★その二

(財)愛のともしび基金より補助金を頂戴して

ビデオプロジェクター 一台
テレビ 十二台

を購入しました。昔懐かしい映像を大きく拡大して、大勢で楽しんでおります。

★補助金

日本自転車振興会競輪 九百六十五万九千円

池田町 三百万円

愛のともしび基金 四十六万円

ご協力を賜りました関係各位に謹んで感謝の意を表します。

